

氏名	たなか まり 田中 麻里
学位(専攻分野)	博士(工学)
学位記番号	論工博第3701号
学位授与の日付	平成15年1月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文題目	タイにおける住空間特性と住宅計画手法に関する研究

論文調査委員 (主査) 教授 小林正美 教授 鈴木修一 助教授 布野修司

論文内容の要旨

本論文は、農村から都市への人口集中が続き、中低所得者の住宅供給が急務であるタイの住宅計画を主題にしたものであり、バンコク市内で計画的に建設された都市住宅を調査し、供給された住宅での居住者の自主的住宅改善に着目した分析から、タイの伝統的住居に固有な住空間の存在を指摘し、それを生かした住宅計画手法を示したものである。

全体は7章からなり、序論に続く、本文5章の展開を踏まえて、結論を導いている。

第1章は序論で、研究の背景と目的を明らかにし、本研究の位置づけを明確にしている。

第2章では、バンコク市の住宅政策や住宅建設資料を調査・収集して都市住宅の供給実態を分析し、それが給与住宅型、個人建設型、民間開発業者供給型、政府供給型の4タイプに類型化されることを示した。この住宅類型は、多様な都市の住宅を把握するための一つの解であり、次章以降の対象事例住宅の位置づけを明確にしている。また、住宅計画を考えるうえで重要となる住宅建設技術に関わる研究動向について、東南アジアの建築研究機関の実践と課題を明らかにしている。

第3章では、都市における住空間の特質を考察するうえで、その背景となるタイ農村部の伝統的住居の変遷を調査し、生活及び儀礼空間となる広間空間の重要性を、住居の構造や設備が変化しても広間空間が継承されている事実から示し、仏教信仰に深く結びついたタイの伝統的住様式の特徴を明らかにした。

第4章～第6章では、第2章で提示された都市住宅類型のなかでも、中低所得者層を対象とし、居住者による住戸改変を許容した住宅計画手法によって計画的に建設された住宅地の自主的住宅改善に着目した調査分析を行っている。第4章では1980年代に急増し、給与住宅として供給された建設労働者用仮設住宅を調査し、住宅改善が容認され、住宅の維持管理に居住者が関われる仕組みが存在していること、仮設住宅では農村住宅の広間空間が凝縮して再現されていることなど、豊かな生活空間の形成が行われている事を明らかにした。

第5章では1970—80年代に建設された政府供給のコアハウジングを調査した。コアハウジングとは、道路や水道、電気などのインフラが整備された住宅地に、簡単な水回りのコアもしくはワンルーム程度のコアハウスを供給し、その後の建設は居住者に委ねる住宅計画の手法である。物理的なコアハウスの計画および供給とともに、居住者による環境形成への支援が両輪となる計画手法であるにもかかわらず、タイでは住民の自力建設過程で供給側からの支援がないために不評に終わった事実を示し、初期に多様なプランで始まったコア住戸が、居住者の自主的、段階的改変により広間空間中心型に改変されてきた実態とその要因を明らかにした。

第6章では1930—40年代に建設されたタイ国有鉄道職員のための給与住宅を調査した。英国留学のタイ人建築家の設計した、タイ中部の伝統的住空間構成であるタイトウン(床下空間)やチャーン(テラス)といった半屋外空間と、西欧の寄棟・テラスハウス形式の折衷様式の住宅は、バンコクに現存する初期の給与住宅事例として貴重な集合住宅であることを示した。また60年に及ぶ住宅地の変遷を緻密に分析することによって、とくに共用テラスが生活および儀礼空間として重要な広間空間の役割を果たしてきたため、永年の使用に耐えられた事実を明らかにした。

第7章は結論であり、タイの伝統的農村住居が持つ生活空間と、都市で計画的に供給された住宅における居住者の自主的

住宅改善を分析・比較し、その共通点からタイ固有の住空間特性を明らかにし、それを生かした住宅計画手法を提示した。

論文審査の結果の要旨

本論文は、農村から都市への人口集中が続き、中低所得者の住宅供給が急務であるタイの住宅計画を主題にしたものであり、バンコク市内で計画的に建設された都市住宅を調査し、供給された住宅での居住者の自主的住宅改善に着目した分析から、タイの伝統的住居に固有な住空間の存在を指摘し、それを生かした住宅計画手法を示したものであり、得られた主な成果は次の通りである。

1. バンコク市の住宅政策や住宅建設資料を調査・収集して都市住宅の供給実態を分析し、それが給与住宅型、個人建設型、民間開発業者供給型、政府供給型の4タイプに類型化されることを示した。
2. タイ農村部の伝統的住居の変遷を調査し、生活及び儀礼空間となる広間空間の重要性を、住居の構造や設備が変化しても広間空間が継承されている事実から示し、仏教信仰に深く結びついたタイの伝統的住様式の特徴を明らかにした。
3. 1980年代に急増し、給与住宅として供給された建設労働者用仮設住宅を調査し、住宅改善が容認され、住宅の維持管理に居住者が関われる仕組みの存在を示し、農村住宅の広間空間の再現など、豊かな生活空間の形成が行われている事実を明らかにした。
4. 1970—80年代に建設された政府供給のコアハウジングを調査し、それが住民の自力建設過程で供給側からの支援がないため不評に終わり、初期に多様なプランで始まったコア住戸が、居住者の自主的、段階的改変により広間空間中心型に改変されてきた事実を明らかにした。
5. 1930—40年代に建設されたタイ国有鉄道職員のための給与住宅を調査し、英国留学のタイ人建築家の設計した、タイ中部の伝統的住空間構成と西欧の寄棟・テラスハウス形式の折衷様式の住宅は、テラスが広間空間の役割を果たすことで、永年の使用に耐えられた事実を明らかにした。

以上、本論文は、タイの伝統的農村住居が持つ生活空間と、都市で計画的に供給された住宅における居住者の自主的住宅改善を分析・比較し、その共通点からタイ固有の住空間特性を明らかにし、それを生かした住宅計画手法を提示したものである。これは日本を含めたアジアの住宅計画においても有効な視点と方法を提供するものであり、学術上、実際上寄与するところが少なくない。よって、本論文は博士（工学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成14年12月17日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。